

飯舘村見学レポート

私の感想のテーマは想像と現実の違いである。私は今回飯舘村を訪れ、報道では伝えられていない部分が余りにも多いということを再実感した。実際、テレビ等の報道では現実に発生している事象の極一部しか採り上げておらず、真実は全く伝えられていないと思う。

「飯舘村は二度と足を踏み入れられないような場所だと思っていた。」

私の所属する研究室の中国人留学生（博士課程）の言葉である。私の研究室にはアジア圏からの留学生が数名所属している。彼らは今回の事故に関する関心も強く、震災後は留学生仲間の中で情報交換を活発に行っていたらしい。そのため、福島県の飯舘村についても多少知っていたそうだが、テレビのニュースやインターネットからの情報だけではやはりかなりの誤解が生まれていたようだ。しかし、それは私にとっても同様であった。私は、飯舘村も震災による家屋の倒壊等の目に見える被害が存在していると想像していた。また、村というイメージと、放射性物質という得体の知れないものが大量に飛散した土地という情報が合わさって、元々活力のない小さな共同体が、放射性物質の影響によりひどく荒廃し、閑散としている様子を想像していた。

ところが、現実には予想と大きくかけ離れていた。飯舘村は大きな倒壊もなく大変美しい場所であり、キャンプ場等村民の憩いの場や、村役場、中学校等公共の施設も綺麗に整備されていた。それは私が持っていた村のイメージとは大きく異なっており、非常に驚いた（イメージとの合致は住民がいないことのみであった。）。また、飯舘村は飯舘牛のようなブランド牛の開発を始め、村の特産品をアピールすることにも熱心であることを後から知った。これらは村長を始めとし、村民が共同で努力してきた成果である。この成果もあり、県にゆかりのない方が第二の人生を始める為に移住されることもあるほど活力のある魅力的な村であったとも地元の方から聞いた。

ところが、その村を原子力発電所事故が襲い、村民は村外に避難することとなり、これまで丁寧に育ててきた作物や家畜、田畑、里山等を放棄せざるを得なくなった。これほど魅力的な場所に容易に立ち入ることが出来なくなることは、飯舘村の方だけではなく日本人全体の損失であると思う。しかし、我々が失ったものをどれほど正確に報道は伝えているだろうか、そしてどれほど多くの日本人が正しく現状を理解出来ているのだろうか。

予想と現実の違いは飯舘村のイメージだけではない。放射性物質と線量についても大きな勘違いに気付かされた。福島県には現在、公共施設を中心とし、多くの地点にモニタリングポストが設置され日々の放射線量の情報を提供している。そして、その数値を基にして様々な決定が為されている。飯舘村には村役場の正面に設置され、この数値が“飯舘村”の放射線量として公表されている。我々が訪れた時、役場のモニタリングポストは約3μ

Sv/時を示していた。しかし、役場のすぐそばの藪の近くで測定を行うと容易にその倍の6 μ Sv/時を示した。これはどういうことであろうか。恐らく役場のモニタリングポストが舗装された場所に設置され、周囲に樹木も少ないといったことが原因であると考えられる。放射性物質の降下量は場所によって大きく違う上に、降下後の挙動も土質や植生、雨水の移動等様々な環境要因によって千差万別である。そのため、同じ地域でも数メートル移動すると放射線量が10倍も異なることすらある。今回の見学においても、道路の中心で測定すると数 μ しかないが、道の端に移動して測定を行うと10 μ を超過してしまう地点が存在することも実際に確認された。これらの経験から、一つから数個のモニタリングポストが広い地域を代表していることの不自然さに気付いた。そして、このような粗いモニタリングで広い地域の除染計画等を決定するという点についても疑問を覚えた。

飯舘村見学の最中、イノシシの一家を発見した。両親と3匹のウリ坊の家族である。彼らは、放棄された畑に乗り込み、鼻で穴を掘りながら何かを食べていた。傍から見学する上では非常に微笑ましい光景であった。一家と分かれて僅か数分後、今度はサルの群れに遭遇した。しかし、彼らは直ぐに山中に逃げてしまった。サルもまた、イノシシと同じく田畑を荒らす害獣であるそうだ。“ふくしま再生の会”の方の御話しによると、サルは田を電圧線で囲んでも、うまく入り込んでイネを食べてしまうそうだ。この話には非常に驚かされた。この光景を単純に捉えるならば、昔から続いている農家さんと野生生物との永遠の戦いの様子に過ぎない。だが、現在彼らの体内に放射性物質が徐々に蓄積していると考ええると、非常に悲しく申し訳ない気持ちになる。実際に、放射性物質が高濃度に蓄積したイノシシ等の野生動物が発見されている。これは、チェルノブイリ事故の際にも報告されていることであり、恐らく彼らが、放射性セシウム濃度が高いとされるキノコやコケ類を常食としているからであると考えられる。実際に彼らの体に悪影響があるかは分からない。しかし、これらは自然界には存在しない人工の放射性物質であり、人間が放出してしまったものである。福島という土地には日本人が多く住んでいるが、決して人間だけの土地ではない。私達は、そういった観点からも反省するべきではないだろうか。また、このような観点からは、東電も一般人も関係はなく、私達人間全体に責任があると私は思う。

しかし、起こってしまった事はもう如何しようもない。大切なことは現在何が起きているのかを正確に知り、今後活かすことである。だからこそ、積極的に研究者が現地に入り、調査を行うべきであると思う。そのため、溝口先生を始めとしたふくしま再生の会の方々がされている村内の環境モニタリングの試みは大変素晴らしいことであると思う。対して、農林水産省が実験用も含めた作付け制限を提示したことや、現場を知りたいという学生の活動を大学が制限していたことについては理解に苦しむ。

飯舘村役場の石碑に記された村歌「夢大らかに」が今も頭に強く残っている。歌では故郷の自然を讃えており、恐らくサビとなる部分には、「ああ、我ら今こそ 手と手 固く繋ぎ

て 村を興さん 村を興さん」(一題目)とあった。飯舘村の美しい山川は今もなお存在している。しかし、そこには目に見えない物質が存在しており、事故以前とは大きく異なる。稲を植えることさえ許されない。震災以前の飯舘村では、恐らくこの歌詞の通りに村民同士が手を固く繋ぎ、魅力的な村興しを実現してきたのだと思う。その分この歌からは、村民が大切にし、そして失ったものの大きさや重みを感じられる。今後村を興すには震災以前とは比にならないほどの苦労があるだろう。繋いできたはずの手が村外に追いやられてしまっているためである。それでも村を興そうと努力している人々がいる。

復興を目指す為に、これからは共同体の内外を問わず手を繋ぎ協力していかなければならない。当然それは飯舘村に限った話ではなく、震災で被災した地域全体の復興についても同じことが言える。しかし、被災地外の人々が持つイメージと、現場の実情がかけ離れていた場合、的確に支援、協力することが出来ない。そこで、現在何が起きているのか、何が求められているのかを正しく知り、現状を広く正確に伝えることが必要となる。

私は、政府や研究機関、報道機関、そして我々が今回の震災や事故について、自身の行為や各機関の相互連携についてじっくりと反省に取り組み、考え続ける必要があると思う。

放射性物質の汚染についてより多くの人を知ることは非常に有意義であると思うので、来年からは是非とも農学生命科学研究科の授業科目として採用して戴きたいと思います。特に“官僚“や”マスコミ“志望の学生には是非とも参加して戴きたいです。

先生方、再生の会の方々、現地の方々に心から感謝申し上げます。

